

令和2年度第2回レインボープラン評価検討委員会

会 議 録

日時：令和3年3月4日14時～15時50分

会場：旧長井小学校第1校舎

1. 開 会

2. 委員長あいさつ

前回の資料説明に対して多くの意見をいただき感謝。前半は皆さまの意見を発表してもらい、後半は事務局で整理したものを説明し、それぞれ質疑応答を行う。よろしくご協議願いたい。

3. 協議 【座長 下平裕之教授】

■意見集約票について

① 各委員発言及び質疑応答 資料1

意見集約票をもとに、委員全員に発表してもらおう。その後、各自の意見の主旨を明確にするため意見交換を行う。

※①報告書について ②現状と課題について

委員 E：①昔、小学生時代に学校で学んだが、自分のような年代の人はもう忘れてしまっているし、転入等で新たに市内に入られた方やレインボープランを学んでない人は沢山いる。そういった方たちに改めて良さを知ってもらおう。SNSを使う、転入の際は窓口でチラシやパンフレットを配布して、現在活動している人達だけでなく全体で取り組まないと現状維持のままだと思う。平野地区に住んでいるので、中央地区以外の人は何かできることがないのかと思っている。ゴミの分別についても意識はしているが、どうしても自分たちには関係がないと思う人も少なくないのではないか。

②子育てする立場としては（5歳と4歳の子育て中）、子供たちにレインボー野菜を食べてもらいたいと思うが、課題の年間コストを考えると、子育て世代や高齢者のための福祉など、もう少し違う使い方をして、長井市をもっと住みやすいまちにして人口減少を食い止めることも必要ではないかと思う。

委員 F：①まずはプランが20年も続いているのはすごいこと。しかし、（市内他地区から）中央地区に嫁いできてから知った。はじめは生ゴミを分別していたが、そのうち面倒くさくなってやめてしまった。レインボープランを頑張って続けている人達もいるのに、自分はあまり関心を持たず生活しているし、協力度は低いなどと思っている。

②コストの点。収入約120万円、支出約5000万円というのは驚きだった。一般企業

ならないなと思う。今後も突発的な修繕のおそれがあり、更なる財政負担は疑問。年間 5000 万円もレインボープランだけでなく、最近心配な災害対策に回してほしい。レインボープランの取組自体はとても良いと思う。

委員 G (座長代読) : ①高校時代に授業で取り上げられ、高く評価されていた。同じ市民として誇らしくもあったが、中央地区民でない私にとって実感がないことでもあった。事業報告でもあったように、創設当時は多くの研修視察や見学も行われ、経済効果があったと思うし理解もできた。

②農家の声として、やはりレインボー堆肥にはネガティブな意見が多い。一方、私も畜産農家として、堆肥の処理は大きな問題でもある。レインボー堆肥よりも、畜産堆肥の取引が多く優良ならば、畜産農家の利用や協力を検討してはどうか。私たちも堆肥利用を促進するため、農政補助金を活用し、地域農家と協力している。しかし、生ごみの減少やコストの増加を考えたり、レインボー栽培農家の利権も感じる。行政としては、やりたくないのが伝わる報告書だった。

委員 B : ①さすが大学の先生の報告書で細かく立派な内容で感銘を受けた。しかし、農家として市民として、やはり思っていた通りの内容で、数字がよく読み取れるものだった。

②一番課題となっている、コンポストの生産に関わるコストを、このままでは当然いけないことは分かっている上での検討会である。では、やめてしまう、ということにもならないことは皆さんも承知ということを考えて、何とかコンポストセンターをうまく活用して、5年10年過ぎしながら、少しでもうまい具合に次の世代に引き継いでいかなければならない。委員 G の意見にあるような、畜産農家の連携、一部委託などの形を検討しないと維持できないのではないかな。

委員 H : ①レインボープランは「域産域消」で完結してよいと考える。これは、域外への販売を進めても関心は薄いだらうと思われ、また、同じ市内においても、実施地区とそれ以外では差がある。

長井市は米沢牛の生産エリアなので、畜産堆肥の有料収集や持ち込みにより、コンポストの質と量を改善して、土地利用型作物（※稲作など）への利用を増やして行く方が良い。飯豊町のやり方を直に見て、畜産の振興にも役立つのではないかと思った。

②農業者には、循環型農業の理解者、実践者も多い。レインボープランは長井市の看板だという声も聞くが、近年、環境負荷の少ない農業が当たり前で、特別栽培農産物にプレミアムがつかない。これはレインボープラン認証も同じだろう。

費用対効果で見れば撤退。数字だけを見ればそうだろうが、先に委員から意見があったように、何かをプラスして農業者、非農業者ともに豊かな気持ちになれる何かを探求したい。

委員 I : ①ずっと関わってきたので、長かったという思いと、委員 A の指摘のとおり検証してこなかったことが非常にまずかったなと思うが、これからも何とか進めたい。費用対効果から将来を見据えて、SDGs とレインボープランをうまく関連付けて、何とか活用してまちづくりをしていただきたい。

②畜産堆肥との連携は非常に大事で、生ゴミは減る一方だが、分別して出してくれる市民の思いも生かせるように、種菌にして畜産農家と協力して散布する方法はないか。飯豊町ではコストのかからない堆肥化をしているので検討していければ。

日本は食糧の輸入国でありながら、このごろは輸出、輸出というが、やっぱり自給自足は大事で、レインボープランのはじまりから地域内循環は大事。大豆市場では、中国で買い占めがおきたため価格が高騰して、輸入も大変になるようだ。そういったこともあるので、ぜひ子供たちの将来を考えて知恵を絞っていければと思う。

委員 J: ①今、SDGs、持続可能な開発目標が掲げられているが、数十年前から高い理想を掲げてやっていることは素晴らしいこと。加えて、この事業は様々な方が関わり、生産者だけでなく、例えば教育の面からも、子供たちの学習材であるとか考えるための一つの手がかりとして、地元で素晴らしい学習の種があるということ、現在でも、その活動の有用性が、学習の足掛かりとなる素材であるということを理解することができた。

②小中学校でもそうだが、若い人たち、子供たちが減ってきている。極端な話、子供たちがいなければ学校の先生もいないという話にもなる。このまま人口減少が進めば、当然生ゴミも減るが、生産の担い手、野菜を消費する人たちも減り、社会的な課題もある。そういったことから、かかる費用とそれに見合った収益（成果）を考えると、やはり見直しは必要。

中央地区に住んでいるため、寒い冬の朝、雪降る中、暗いうちに高齢の方が苦勞して生ゴミを出しているのを見かけるにつけ、中央地区で協力されている方の負担を考えるし、前向きに取り組むには課題なのかなと思う。

委員 C: 10年前の原発事故で長井市に移住してきて、当時の自分が考えたことを振り返っている。住んでいたところの3、40キロ先に原子炉があって、学習塾のほかにも、子供たちと様々な活動をしていた。原発にも見学に連れて行ったこともある。東電から原発の合理性や経済性、安全性の説明を受けて、絶対に事故は起こさない、安心してくださいと繰り返し聞いていたが、23年後に事故を起こした。そういったことから、自分の暮らしについて考えるようになり、一番思ったのは、合理性や経済性、効率性の象徴である原子力発電所があって、そうでないらしのあり方やまちづくりを考えた。その時、長井市のレインボープランを知った。兄が住んでいたことや教科書の教材にあったこともあり、自分なりに理解を深めていく中で、なんと素晴らしい取り組みだろうと。SDGsに先駆けて進めてきたまち、取り組みについて、これからも子供たちに学ばせたい思いがある。

深くお話を聞いていくと、コンポストセンターの課題などがあって、費用の面で大変という話があるが、まずそういったことを度外視して、外から来た人は強く心惹かれる取り組みであることは申し上げておきたい。

広告費という面では、長井市を外に知らしめるために非常に効果的だった。コスト面では、合理性や効率性を正していかなければならないが、何とか今までのレインボープランの、残すべきところを明確にして象徴的なものとして残してゆく。学校給食

米はレインボープラン認証米と聞いていたので、中央地区の皆さんが取り組んでいる生ゴミからできているコンポストを利用した米だと。子どもたちのことを十分に気にかけている地域の大人たちが作った米だということをアピールすることで、域内循環は達成されていることを知ると、取り組みやすいのかと思う。

コンポストを利用した酒米を鈴木酒造で使っている。そのラベルにはレインボープランの記載があり、もともと、さわのはなという品種でつくられてきたお酒を避難者である私たちの手でリニューアルしたもので、毎年、震災発生の日に全国で販売される際には、多くの人達がレインボープランを目にする。こういった外に向けての取り組みとして残していければ、最初から取り組んできた人たちの思いに、継続的に応えることができるのではないか。

レインボープラン市民農場で、市街地に住む市民が自由に農作業をすとか、収穫体験ができるようなシステムにすると、生ゴミを出すことの意義が浸透するのではないか。市の移住定住コンシェルジュをやっている関係で、長井市に興味を持ってやってくる人は農業体験をしたがるし、必ずレインボー野菜を購入できる場所、食事ができる場所を聞かれる。レインボープランがきっかけとなって移住してきたものとしては、何とかして残してもらいたい思いがある。

委員 K：①20年くらいレインボープランに関わってきて、協議会の前会長も務めた。市民を中心によく続けてこられたものだというのが一番の感想。20年前はまだ会社勤めをしていて、近くの公民館の説明会に出席したことを覚えている。今まで聞いたこともないことが長井で始まるのだという驚きが大きかった。最近では、家庭で出る食品残渣を家庭で堆肥化して契約農家に届けるという動きもあるが、レインボープランはあまりにも早い登場で、市民はついてこれなかったのかと思う。今であれば、もっと取り組みが進んだのかとちょっと恨み節も出てしまう。20年も続けてこられたのは長井市民の市民性が反映されたためで、それを発見したことは大きい。ただ、時代は変わって、小家族化した。食生活も食習慣も変化し、少しずつ生ゴミは減ってきた。先ほど気付いたが、中央地区とそれ以外では、意識の大きなズレがあったと思った。うすうす関係者の中で感じていたが、これほどまで大きいと思わず、委員 E や委員 F のお話を聞いて欠点だったと改めて反省するところ。

コンポスト認証の厳しい制度には大きな意味があって、消費者の食に対する関心や意識の向上に大きな役割を果たした。日本全国、世界でも大きな評価を得て、大勢の視察や多くの報道など大きな関心をいただき、多数の表彰も受けた。他が成し得ないことに対しての表彰だったが、それが意外と市内では知られなかった事は残念。

経済効果というのは、目で見てわかるものと換算して見えてくるものがある。見える効果に捉われがちだが、心の効果、市民の結びつきや信頼感、安心感、ひいては市の豊かさに繋がってゆくのではないかと活動を通して実感してきた。

②行政は税金を使って予算、決算が成り立っていることから評価も数字や金額にならざるを得ない。そして、コンポストセンターが修繕を重ねて、今後どうなるかわからない状態であって、修繕費用は年を追う毎にかさんでくるのは当然のことで、思うに、

この事業は当初から 15 年、20 年程度の事業計画ではなかったのかと思う。もし、生ゴミ、堆肥、農産物、台所、その循環が市のコンセプトとして確かであれば、修繕費用の積み立てなど、当然手立てがあったはず。現実的に考えて、その設備が近い将来、途切れてしまうことは確実。

レインボープランの業績は非常に大きく、親戚の東大教授が自宅に来た時には、知らない人はいないと言わしめたくらい、ネームバリューは大きい。世界は SDGs に向かっているが、レインボープランと共通するもので、レインボープランの灯は消してはならないと思う。今のやり方を続けてゆくのではなく、その精神を長井市のカラーとして引き継ぐ。そうしなければ、今までレインボープランを学んできた子供たちはどうなるのかという思い。では、これからどこをどうやって残してゆくのか、その方法は、金銭的などころを含めて、これから考えていかなければならない。

<意見交換>

座長：委員 F のご意見について。市民アンケートにもあったが、生ゴミと可燃ごみを分けるのが面倒くさいとのことだが、具体的にどのような部分か。

委員 F：夏場の臭いで置き場に困り、外に置くと猫の被害にあう。収集所まで結構遠く、臭いのするバケツを運ぶのが大変でやめてしまった。

委員 A：臭いの問題でいうと、生ごみ回収をしているところが増えてきているので、臭い対策等、改善策がないのか。あるいは家庭の中で工夫している点はないのか、アイデアを集めてみるのはどうか。

また、コンポストセンターのコストをどうするかという大きな課題については、委員 B の提案もあったが、委員 I の「堆肥を種菌にして畜産農家と連携」の部分を具体的にお聞きしたい。

委員 B：イメージとしては、コンポストセンターの生ゴミに畜産堆肥、もみ殻も搬入し、重機で切り返すなど、簡便な方法で継続してゆく。ただ、生ゴミをどう処理しているのか詳しくないため、わからない部分もあるが。委員 I に聞いたところうまい方法があって、種菌とは生ゴミで、それを元手に増やして使いやすいたい肥をつくる。

連携はまた違ったイメージ。畜産農家の堆肥場に委託して生ごみを受け入れたい肥をつくる考え。しかし、レインボープランの初期には農地をゴミ捨て場にするのかという意見もあった。20 年をかけて研究され、安全性や中央地区の分別の精度が確保できているから成り立っていること。その文化を絶やさないために、畜産農家の協力を得て散布や供給ができるシステムができないものか。

委員 I：コンポストはダンプ 1 台分使用だが、もう少し使いたいために、コンポストに畜産農家の堆肥と糠を混ぜて使っている。コンポストを農地に使うことで、大変な思いをして生ゴミを出している市民にお返しする、安全を提供し循環を実践するという、ひとつの思いを受け止めるためにやっている。コンポストだけで農産物は作れるわけでない。畜産農家には堆肥がたくさんあるとすれば、循環のひとつとして散布などに協力いただければ、市民、農業者、畜産農家のいずれにも良い。

コンポストセンターはやっぱり大変になっている。長井市民はきちんと分別されているが、それでも不純物（金属、プラスチック）は入っている。それを取り除く設備がセンターにはあって、その作業は必須。畜産農家へ直に生ゴミ搬入はできない。

委員 A：委員 B 提案のローダーで切り返すのがいいのではないかという話だが、どういうことか。

委員 H：農林課長からコンポストセンターのコストの件を聞いて、ローダーで攪拌して切り返すれば自然と良質な堆肥になっていくという認識で、なぜ多額のコストがかかるのか疑問だったが、やはり生ごみの中に色んなものが入っていて、必ずしも分別されているわけではないと。それを取り除くためにコストが大きくなっている。

農林課長：加えて、今の建物の構造上からローダーが入って作業するスペースがない。違う施設で攪拌する方向になれば、また改めて検討が必要。

委員 H：委員 B の意見を受けて。サテライト方式を取り入れている事例があり、畜産農家の堆肥舎を利用するのはいいと思う。しかし、レインボーの理念は生ゴミを堆肥化して野菜をつくることなので、畜産堆肥だけではレインボーにならない。種菌とはその部分だと思う。課題は、堆肥をつくることと堆肥を使う（散布）ことにあり、両方考える必要がある。

SDGs について。あらゆる場面で少しずつ知られてきている。一般社会に浸透してくれば、伝えたかったレインボープランの理念と同じになる。

委員 A：サテライト方式とは。

委員 H：畜産農家の堆肥舎はたくさんあるし、置賜は米沢牛の生産地でまだまだ伸びしろがあり、それらとタイアップする。今のところ、直接生ゴミを受け入れているわけではなく、可能性として。

事務局：非農家の委員の方にお尋ねしたい。今までレインボープランは農林振興を第一の目標としていたが、生ゴミを分けて出すことが、農林振興に生かされる事へのやりがいやメリット、貢献していききたいという気持ちはあったか。生ゴミを出す市民のメリットが薄れている、あるいは置き去りにされているのではないか。自分も生ゴミを出す同じ立場として感じているから。

委員 E：中央地区以外に住んでいるので、どうしても他人事。幼稚園の送り迎えの時に見かけるが、自分がそれをするかとなると…。集めた生ゴミがそこからどうなって、結果こうなると知れば、じゃあ、やろうかなという気持ちになると思う。

委員 F：渡部委員と同様で、生ごみを分別してメリットを感じる前にやめてしまったので…。生ゴミを出すとポイントが付くというような、目に見えるメリットがあるといいなと思ったこともある。

② 意見の整理について 資料 2

委員 K：当初から関わり、長くその中にいたので、自分の周りではこれが当たり前という認識だった。生ゴミは分別して出す人がほとんどで、視察などで当事者の発言を求められても、あたり前で苦痛ではない、異物が入らないように気を付けています、

と答えてくれていた。今、皆さんの様々な意見を聞くと、本当にその通りで、これまで続けてきたレインボープランという名前をそのまま残しながら、新しい方向に転換する。生ゴミで堆肥をつくるにしても、従来と違った、コストを意識した新しい形、みんなが取り組みやすい方法で取り組めればいいし、それが長井市の SDGs の取り組みの看板となってくれば。

委員 C: SDGs を一番察知しているまちであり、これだけ長く取り組んできたまちのプライドとして取り組んでほしい。時流に乗るために体裁だけ整えればいい、というのではない。レインボープランの精神に基づいた新しい形。現状での判断だけでなく、これまで関わってきた人たちの思いにも配慮してほしい。

参考までに、奈良県生駒市で実証実験を行っている（※）。当地では、ながいコインも始まっているので、何か新しいことを提案したい。

（※別紙参照）

委員 J: この取り組みはお金では価値が図れないと思った。学校現場にいと、長井市内でも核家族化が急激に進んでいると実感する。20年前と比べ人口は減っているのに世帯数は増えていて、若い世代の方々に、朝6時半から8時くらいの間に生ごみを捨ててからお仕事に行ってくださいよとお願いできるのか。祖父母と暮らしている、そのような世帯ならば可能だろうが。持続可能を目指すならば、これからの若い世代のライフスタイルにも寄り添ったアイデアの出し合いが必要と感じる。

この4月から学校給食共同調理場が稼働して、委託炊飯だったものが一括提供できるようになる。このように、長井市内でさまざま転換期の時期に来ていると思う。将来を担う子供たちに、認証米やレインボー野菜の価値を認めてもらえるブランドづくりが必要であると感じた。

委員 I: 生ゴミを出すのはやっぱり大変だ。協議会から生ゴミを家庭で堆肥化して、野菜作りに生かしたりする方法を聞いた。成田では、コンポストセンターでは臭いがきつく、堆肥化もなかなかならないという話なので、そういった簡便な方法もいいと思うし、ポイント制は賛成。

子供達には生きるために必要なこと、食べ物や生き物、プラスチック、環境、災害など SDGs につながることは、体験を通して学ばせたい。

長くかかわってきた中で、レインボーの最終目的として有機農業をめざしている。課題が多くてなかなか到達できていないが、学校給食に無農薬の食材を何か一つでも提供したいものだと思う。レインボープランの思いをそこに注ぎたい。

委員 E: 個人的にはマイナスイメージが今日まであったが、意見を聞くと形を変えて続けていかなければならないのかと思う。自分の子供を思うと、長井市では、かつてレインボープランをやっていました、というのは可哀そう。レインボープランをやっています、皆さんも取り組みましょうという形で、実施地区以外も巻き込んで続けていけたらと思う。

委員 F: 皆さんの意見を聞いて勉強になった。形を変えて続ける方向性がいい。委員 C 提案の市民の収穫体験、農作業体験ならば、自分も参加してみたい。

委員 B: 総論については賛同するところ。各論については、生ごみ用の家庭バケツを買い求めようとする、少人数家庭用（少容量）しかない。そこからして、ゴミの文化が変わってきていると感じる。行政で適したバケツを配布して協力を求める。総論だけでなく、具体的な方法の議論を進めていく。SDGs に関して、家人に意見を求めたところ真っ先にポイントの話があって、若い世代はそれがないと無理だろう。

委員 H: 参加している意識がないとそれまでだ、と思う。ポイント制にしろ、農産物生産にしろ、何か、関わりの手法を考える。メリット感があれば、打算的に聞こえるが結びつきが強くなるのではないか。

委員 A: 今日、皆さんの生の声がたくさん聞けた。レインボーの目標は何だったのか。ひとつは農業振興、もうひとつは家庭の生ごみをリサイクル活動で減らしたいということだったと思う。より印象深い、家庭のリサイクル活動の部分が世間的には感動を呼んだ。そして、もうひとつ大事な目標は食の安全。最終的に無農薬を目指したと思われるが、そこが非常に気になる。現場を様々目にして、無農薬の大変さは十分承知しているため、そこを目指せとは言えないが、現場を知らない都会の人は無農薬、オーガニックを求めるし、レインボーでも当然、目標として取り組んだ結果特別栽培となったのだろうが、それでは今や都会の人は納得しないし、何の差別化にならない。

では、レインボーはいったい何だったのだろうか。それは、無農薬栽培を目指すことではなく、生産者と消費者がつながることであって、何も生ゴミでなくともよいのでは。生ゴミを出すだけでは、ただただ集積所の臭いが存在するだけ。お互いの顔や様子が見えることが重要で、その視点が徐々に抜け落ちていったのではないか。現実を見ると、つながりが抜け落ちていたと思われ、もう一度レインボープランとして、中心部と郊外のつながり、どんなふうを持てるか問い直す必要がある。さらに、東京と長井のつながりを、レインボープランを通して考える。都会が求めている SDGs を、レインボープランのつながりの現場で見ってもらう。インパクトのある情報発信。少なくとも、地域内では、生産者と消費者がしっかりとつながっている姿が大事。そういったことでも、集中方式（コンポストセンター）から分散型（サテライト）へ転換の提案もある。家庭の生ごみを直接持参して、生産者と触れ合うイベントを設ける。いずれにしろ、顔が見えなくなるといい加減なことをしてしまうもの。

また、レインボープランが本当に、環境にいいのだろうかという点を問い直さなければならぬ。なぜ、生ゴミを燃やしていけないのか。生ゴミが減ればコストが下がるというイメージだが、実際コストは下がらず、むしろ上がってしまった。また、燃やさないから CO2（温室効果ガス）を出さない、環境にいいという訳ではない。実際、コンポスト生成の際に発酵してメタン（温室効果ガス）が生成され、温暖化に影響している。今のままだと、環境的な問題はある。本当に地球温暖化防止の観点からすれば、飯豊町のおひさま発電の例（嫌気環境で発酵させ発電および液肥を肥料として使用）。レインボープランを做っている福岡県大木町で、そこまで

やれば環境に良いと言えるが。さらに、SDGs とするならば、生ゴミだけでなく、紙ごみもプラスチックも、全部取り組まなければならない。そこから取り組みを考えると、レインボープランが SDGs で活きるし、発展形として都市部との展開の可能性も十分に考えられるのではないかと。

座長：環境の観点からは委員 A に詳しくお話しいただいたので、経済の観点から補足。まずは委員の皆さんの率直なご意見に感謝。現時点で、ある程度のメドがついた。これからの新しい方向について、共通認識も持てたかと思う。自身も委員を引き受けてどうなるか考えてみようということだったが、幸いにも、知見を活かして新しい形に活かすという考え方に皆さまが賛成できたことは、非常に感謝するところ。

経済の側面で、ひとつは、素晴らしい取り組みではあるが、ある程度コストは考えなければならない。経済には予算制約という考え方がある。どんなに素晴らしく、最大の利益を上げたくても予算があって、その制約の中で最大のものを考えていくというもの。これまでのレインボープランは理念が先行して、理念を追うとお金がかかっていた。その点が十分に考えられていなかった。今回調べてみたところ、コンポストセンターの耐用年数も限界で、かなりコストがかかっていたことが分かった。やはりこのままでは持続できない、他にも大事なことはあるだろうという意見はあるので、できるだけコストを抑える形で理念を継承するとしたい。

もうひとつは、20 年間に過ぎ、環境技術において技術革新が進んだ。コンポストセンターも耐用年数に達したということなので、20 年の技術進歩を考えて、ちょうど置き換えなければならない。例えばコンポストを各家庭で、という話もあり、新たな技術を取り込んだ形なるべく費用を抑えつつ最大の効果。経済的な側面もあれば、ひとのつながり、目に見えない温かさなど、意見をいただきながら引き続き議論を進めていきたい。

事務局：様々、たくさんのご意見をいただき感謝。

今後、議論を進めてゆく中、いろんな方法を模索するにあたってはやはり財源とセットでないといけない。また、誰が主体となって取り組むのか、改めて考える必要がある。最近の、環境省関連の補助金は、実施の主体として民間が主導するものとしていることが多い。行政だけが主導するべきものではないということ。その点を含めて、環境省の補助について、条件的なもの、マッチングなど研究させていただいた上で、次回にはシナリオをいくつか提案させていただきたい。

4. その他

次回会議開催予定は 5 月下旬